

●全国優秀賞／山形県知事賞●

田んぼはみんなのたからもの

高畠町立糠野目小学校三年

齋藤 さいとう

楓 かえで

私は、あつあつのごはんにのりをくるんで食べる
ことが大好きです。

「もりもり食べてすごいね!」

お父さんとお母さんはそう言っていていつもほめてく
れます。私のいいところは、すききらいなくごは
んを食べられるところです。

私の家の周りには、お米を作る田んぼがたくさん
あります。しば犬のものさん歩をしていると
きに、かんさつをしてみました。

春、田うえが始まると、ゲロゲロとカエルの合
しょうが聞こえてきます。カエルは、田んぼの虫
を食べて生きています。

夏、私の家には毎年ツバメがやってきます。田
んぼのどろを口ばしにくわえてきて、器用にまる
でおわんのような形の巣を作っていました。その

巣から、今年は五わのひなが元気に巣立って行き
ました。

秋、田んぼはいつの間にか、きれいな金色にな
りました。田んぼから、聞こえてくる音がかわつ
ています。カサカサという音になって、トンボやい
なごがとんでいます。

冬、田んぼに雪がつもってまっ白です。ガアガア
と空から鳴き声が聞こえると、白鳥のむれがやつ
てきます。白鳥は、田んぼを口ばしでつついてい
ました。ふしぎに思ってお父さんに聞いてみると、
こう教えてくれました。

「田んぼに落ちているお米や、土の中にいる生き物
を食べているんだよ。」

田んぼは、お米を食べる私たちにも、お米を食べ
ない生き物たちにも大切です。田んぼがあるから、
たくさんのいのちがあることが分かりました。

その年にしゅうかくされたお米を「新米」とい
うそうです。お米や田んぼのことを知ると、ごは
んをもっとおいしく食べられそうです。大すきな
ごはんをおなかいっぱいに食べられることに感しや
をして、「いただきます」を大切にしていきたいです。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

またやりたい田んぼのしごと

鶴岡市立京田小学校二年

齋藤 睦輝
さいとう むつき

「むつきや、田んぼの手つだいでしてくれ〜。」
と、おまつりの前の日に。パパに言われた。

「じじもやる?」

「うん。」

「むー、田うえきにのりたい!」

「ぜんぜんいいよ。手つだつてくれ。」

ほいく園のころは、ぼくは見ていただけだった。でも、一年生になってからすこしお手つだいをするようになった。今年は、田うえきのそうじゅうせきに一人でのせてもらった。うちの田うえきは、自どうでうごいてすごい。

「ガンダムみたいで、かっこいい!」

ぼくは、田うえきをAIロボットみたいだと思つた。そのかっこいい田うえきを上手にうんでんして

いる。パパは、めちやくちやかっこいい!

ぼくは、田んぼのしごとが大好きだ。いろんなきかいをつかう。いろんな生きものもいる。あきた時には、じじの長ぐつをはいて田んぼに足をつつこんで、あそぶのも楽しい。

ぼくは、なえのはこをはこんだり、あらつたりするお手つだいもした。お昼の休けいの時、
「パワーためる!」

と、ぼくはナタデココ入りのぶどうゼリージュースを買つてのんだ。元気まんたん!田うえの手つだいをじじやばばといっしょに一日やった。つかれて頭がくるいそうだった。でも、きよ年はおもくでできなかったなえのはこあらいを今年はガシヤガシヤできた。あれやると体力つかつちやう。でも、楽しかった。ちよつと自分がすごくなつた気分。

ぼくは、大きくなつたらしようぼうしになりたい。そして、のう家もする。お米を作る。自分でそだてたお米は、きつとせかい一うまい!。パパみたいに、かっこよく、おいしいお米を作るぞ!カエルはきらいだけどね。

●山形県知事賞●

体験、研究で学んだお米の大切さ

鶴岡市立藤島小学校六年

わたなべ
渡部 ひかり

「おはよう。」

朝台所に入ると、いつも朝ご飯を作るおばあちゃん、炊きたてのご飯とみそ汁があります。ガス釜で炊いたご飯はふつくらとしていて、つやつやで甘みがありいつもごちそうより先に全部食べてしまいます。

「卵焼きどが野菜も一緒食べれよ。」

とおばあちゃんに言われますが、何もかけない白いご飯が一番おいしくてやめられません。

私の家は農家なので、春になると種まきや田植えが始まります。去年まではお父さんのトラク

ターや田植え機、コンバインに乗せてもらって見ていましたが、今年は初めて家族みんなで田植えをしました。帽子と運動着、長靴で田んぼに入り、トラックから苗が入った箱をおろして田植え機に乗っているお父さんに渡したり、空になった箱を水路で洗ったりしました。それを何十回もくり返しながら田んぼに苗が植えられていくのを見て、田んぼの仕事はこんなに大変なんだ、毎日当たり前のようにおいしいご飯が食べられるのはお父さんやおじいちゃん、おばあちゃんが一生懸命に田んぼの仕事をしてくれたからなんだと思いました。田植えの後にも毎日の田んぼへの水入れや、除草剤散布、草刈り、水はけを良くするための溝切りなどおいしい米を収穫するためにやることがたくさんあると聞きました。私が学校に行ったり、友達と遊んだりしている間も毎日仕

事をしてくれていることにありがたいの気持ちでいっぱいになりました。

五年生の時に田植えと稲刈りを初めて体験し、今年では家で田植えを体験したことがきっかけでさらにお米のことを知ってみたくなり、夏休みの自由研究で「世界の米料理」について調べました。私は、ご飯を食べている国は、日本や中国、韓国だけなのかと思っていました。世界の五十ヶ国以上で食べられていてその食べ方はたくさん種類があることを知りました。また、日本の米はジャポニカ米という種類に分けられ、白いご飯が基本ですが、他にインディカ米やジャバニカ米という種類があり、それぞれ見た目や食感が違い、それに合わせて料理されていることも知りました。調べていくうちに、他の国で食べられているご飯も食べてみたくなり、お母さんとハワイで

食べられているロコモコを作って食べました。自分で作った料理は作ってもらって食べる料理とはまた違って、一口二口大事に味わって食べようという気持ちになり、とてもおいしく感じました。

お米にかかわる体験や研究をしたことで、毎日当たり前のように食べていたご飯は家族やたくさんの方の努力のおかげで食べられること、お米は私達の生活に欠かせないものでありとても大切であることを学びました。ご飯が食べられる幸せと家族に感謝の気持ちをもって、大切に食べていこうと思います。



●山形県農業協同組合中央会会長賞●

山形からつながるお米の未来

米沢市立愛宕小学校六年

杉澤 すぎさわ 美月 みづき

お米とわたし。正直、私は毎朝パンを食べています。ご飯とみそ汁というよりは、パンと牛乳の方が身近に感じます。でも、今年、お米のニュースが毎日テレビで流れていて、改めてお米について考えました。

私が暮らす山形県米沢市はお米の産地で、私の通学路のすぐ近くには田んぼがあります。春、田んぼに水が入るとお米の季節が始まるなと思います。夏になるとお米が育って、青い空に白い雲、緑の田んぼは、自然の豊かさを感じます。秋になると田んぼが黄金色になって、そろそろ新米が

食べられるなと思います。私の親せきは、稲かりをするとおもちをついてくれるので、それがとても楽しみです。田んぼはいつもそばにあるけれど、ニュースを見たり、お米の学習をしたりして、農家さんが大変な思いをして育てているということが少しずつ分かってきた気がします。

今年の春、親せきの人が集まった時に、山形県外の人が「こんなにおいしいおにぎり食べたことがない」と言っていました。おいしいおにぎりではあつたけれど、そんなにおどろくんだと思いました。私は改めて山形のお米のおいしさを知って、山形県民であることを誇らしく思いました。

山形県のお米といえば、やっぱりつや姫です。つや姫を育てることは、とても大変だと聞いたことがあります。つや姫は、山形県の農家が誇りをかけて作ったお米で、つや姫の栽培マニュアル通り

に栽培し、一定の基準を通ったお米しかつや姫として認められないシステムになっていると聞きました。そんなつや姫は山形県の自慢のお米です。

私は五年生のときに田植えと稲刈りを経験しました。田植えは足が泥に埋まってしまつて上手く歩けないし、植えようとしても苗はなかなかまつすぐに立たなくて、とても難しかったです。稲刈りをするのもとても大変でどれだけ鎌で切ろうとしても切れませんでした。刈った稲を一つに結ぼうとしても全然上手く結べなくて、とても大変でした。今は機械があるけれど、昔の農家さんはこんなに大変な思いをしてお米を育てていたんだなと思いました。

最近、令和の米騒動が起こっています。つや姫は、今は去年の倍の値段になってしまいました。米不足が起きていたとき、五キロのお米が買えな

くなつてしまつて、お母さんといろいろなスーパーをまわつて、やつと二キロのお米を買えた思い出があります。お米がなくなるのは、本当に困ります。そして、お米の適正価格とは、いったい何なのだろうと思いました。今はたしかに高いとは思いますが、前は少し安すぎたのかもしれない。

お米のことを知れば知るほど、いつも身近だったお米のありがたさを感じます。私はこれからもお米を味わつて、おいしくいただきたいと思っています。



●全国優秀賞／山形県知事賞●

家族を笑顔にする、山ちゃんの米

米沢市立第一中学校二年

梅津 うめつ 琉生 りゅうせい

我が家で食べている米は、祖父の昔からの友人である山崎さんが作っている米だ。もう何年も前から祖父が田植えをして、稲刈りの時期になると山崎さんの家に手伝いに行き、夜は、その二人でお酒を交わすことが毎年恒例となっている。年齢を重ねるたびに、作業時間よりお酒を交わす時間の方が長くなっているようにも思えたが、日ごろから野菜の成長具合を話したり、相手の体を気遣う声をかけたりと何年経っても仲の良い友達関係にあることがすごいと思った。

そんな仲のよい祖父の友人を我が家では「山ちゃん」と呼び、山ちゃんの米や野菜、産みたての卵を食べては、「山ちゃんの作ったものは格別！」

と家族みんなで味わっている。そのたびに母は、同じ野菜を作っている祖父に対し、山ちゃんと祖父の野菜の出来具合を比較するようで申し訳ないと思うのか、「こうやっておいしい米や野菜を食べられるのもじいちゃんが山ちゃんを手伝っているからだね」と気を遣った。

新米の時期になると、いつもおいしい米がよりいつそう甘く、炊飯器の蓋を開けるとキラキラ輝いて見える。そしてその米を食べては、家族みんなが「おいしい！」と毎度のように笑顔になった。

しかし、ここ数年前から、猛暑が続き米の収穫量が少なくなった。さらに外国人の日本への旅行客が増え、米の消費が多くなったこと、また米不足がマスコミで報道され、不安になった住民が多く買い占めたことなどが重なり、日本は深刻な米不足になった。テレビでも、いつもお店に並んでいるはずの米が全くない様子や、米の代わりにパンや焼きそばを食べているというインタビューを見たことがある。けれどぼくの家には、いつも米があつたので、不安になることはなかった。

「うちは米をどうしているの？」と母に聞くと、「山ちゃんにもらつているから助かるのよ」と答えた。ぼくは、当たり前のように毎日米が食卓にでてくるので、米があることをそんなに貴重だと思わなかった。

しかし、千葉に住む兄が久しぶりに米沢に帰ってきたあの日から、そんなぼくの考えは一変した。兄は大学野球部に所属しており、年末にしか帰ってこない。その兄が帰ってくると、不思議と我が家の食卓は豪華になる。「なにこれ！めっちゃうまい！」と兄がよく噛みもせずどんどん口に入れたのは、豪華なおかずでもなく、おふくろの味でもなく、山ちゃんの白米だった。しかも白米だけで何杯も何杯もおかわりをした。ぼくは驚いた。ただの白米をこんなにおいしく食べる人を初めてみたかもしれない。兄はもちろん千葉でも米を食べていたが、やっぱり山ちゃんの米が格別だったということをあとから知った。僕は、いつも当たり前のように食べている米がどれだけ贅沢で貴重なものかを思い知った。

ぼくも小さい頃から、兄と同じ野球をしており、母には「米を食べないと大きくなれないよ」、「米を食べないとホームラン打てないよ」と何度となく言われ続けてきた。体調が悪い時でさえも、「米を食べないと元気にならないよ」と言われた。小さい頃から言われ続け、ぼくは毎日米を食べ、大きく成長した。また、今年の春から姉も大学生になり、米沢を離れた姉にも、母が宅急便で山ちゃんの米を送っている。兄は寮に住んでいながらも、やっぱり山ちゃんの米を食べたくなるよう、姉と同じ宅急便で送っている。こうして二人は、米沢を離れてもいつものように山ちゃんの米を味わうことができている。

僕たち家族はこうして離れていても、いつだって食卓の上で山ちゃんの米でつながっていて、おいしい米が僕の家族のみんなを笑顔にしてくれる。そして、山ちゃんの米は体も心も丈夫にしてくれるミラクルな米だ。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

おにぎりに込められた努力に感謝

米沢市立第四中学校一年

房間 円花

「おにぎりがいい。」

体育祭や大会の日は、必ずお弁当をおにぎりにしてもらおう。一番好きなのは塩むすび。ほんのりとしたご飯の甘みが引き立って、元気が出る。私にとつておにぎりは力の源だ。

最近、おにぎりの元となるお米の値段は高騰している。「二倍近くになった。」と母も嘆いていた。都会に住む親戚からは、お米が売られていないから送ってほしいと頼まれた。山形自慢のつや姫を送ると、大変喜ばれた。

お米はどこでも手に入る当たり前の食べ物だと思っていたので正直驚いた。なぜこんなにも高くなったのか調べてみると、気候変動や農家減少な

どが重なったことが要因だと分かった。お米は山の人の努力に支えられているのだ。そんな風に感じられるようになったのは、田んぼアートに参加してからだ。

春、代掻きが終わった田んぼに行き、他の参加者と一緒に田植えをした。畦道を歩くとカエルやイナゴなど、沢山の生き物がいた。田んぼって、稲を育てるだけでなく生き物たちの大切なすみかでもあるんだと実感した。田んぼの泥は想像以上の冷たさで足を引き抜くたびにねっとりとした感触がして、転びそうになりながら苗を植えている。まっすぐ植えることすら難しい。「楽しそう」と思っただけだが、だんだん腰が痛くなり、疲れてきた。でも、今日植えた苗は膨大な田んぼの一部にすぎない。そう気づいた時、農家さんの毎日の努力の積み重ねが、おにぎり一つに詰まっているのだと身にしみてわかった。

秋になり、家族で田んぼを見に行くと、色の違う稲で迫力満点な絵がくつきりと描かれていた。青々とした田んぼには元気をもらえるが、田

んぼアートには見る人を楽しませる力もある。観光客も、とてもきれいだ后感嘆していた。それを見て、私の植えた苗もこの絵の一部になっていると思うと誇らしい気もちになった。しかし、植えただけでは苗は育たない。農家の方達が他にも様々な作業をしてくれたからこそ、こうして稲が育ったと思うと、いつものご飯も特別な味がする。

稲刈りも大変だった。腕はすぐ疲れ、刈った稲を運ぶのも重く全身がくたくたになった。スタッフの方に、

「これで終わりじゃないよ。これから色々な作業をしてやつとご飯になるんだよ。」と教えてもらい、農家さんの大変さを身をもって知ることができた。

その後、自分で植えて刈ったお米を貰い家族で食べた。一口食べると、泥の感触や田植え、稲刈りの大変さがよみがえり、おにぎり一つに沢山の努力と手間が必要だということを心から感じた。ただ食べるだけでは気づけなかったありがたさに気づくことができたのは、田植えや稲刈りを自分

でやってたからこそだと思う。以前は高いと思っていた価格も、農家さんの努力を知った今では納得できる。

そして、二口三口と食べ進めるうちに、もう一つのこと気づいた。私の力の源、おにぎりのことだ。おにぎりは沢山の思いと努力の結晶なのだ。農家の方が丹精込めて育てた米や、朝早くから作ってくれる母の思いが、ぎゅつと握られている。だから、食べる時と頑張ろうと思えるのだ。

「おにぎりがいい。」

夏休みに行われた大会当日、私はいつものように、おにぎりのリクエストをした。お昼にお弁当箱を開け、さつそくおにぎりをほおばった。様々なことに気づいたからなのか、口いっぱい広がる塩むすびのやさしい味に、自然と力が湧いてきて、いつも以上に頑張ろうという気持ちが強くなった気がした。もちろん、このおにぎりが食べられるのも当たり前ではない。これからも、一口二口に込められた、沢山の思いや努力に、感謝の気持ちを持って、大好きなおにぎりを食べていきたい。